論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　石　賢敬

石賢敬氏の博士論文「本動詞から補助動詞への文法化　－韓国語の＜doeda 構文＞と＜jida 構文＞を中心に－」の審査結果について報告する。

本論文は、形容詞が先行すると＜状態変化＞を表し、大まかに言うと「 ～になる」の意味をもつとされる＜doeda 構文＞と＜jida 構文＞について考察し、日本語の「てくる」「ていく」と対応する韓国語の「a oda」「a gada」を分析することで、これらの構文の用法と特徴を明らかにしている。

第１章では、韓国語の「doeda（される、なる)」、「jida（なる)」の先行研究を取り上げている。韓国の国語文法において、「doeda」、「jida」を同じ枠組みに取り入れた研究があるが、その中でも、＜受動＞とみる分析と＜受動ではない＞とみる分析が対立している。この章では、それぞれの代表的な分析を検討しつつ、本論文の目的とその意義について述べている。

第２章は、次の三つの「doeda（される、なる)」の用法の中で、特に形容詞と動詞が先行する用法を＜되다 doeda 構文＞として詳しく考察している。

１．[名詞 -i/ga ＋ doeda（名詞-に＋なる)]
２．[形容詞 -ge ＋ doeda（イ形容詞-く＋なる、ナ形容詞-に＋なる）]
３．[動詞 -ge ＋ doeda（動詞-に＋なる）]

形容詞の先行する＜doeda 構文＞の場合、自然現象のような状態変化の意味を表すだけでなく、何らかの理由があって起こる変化の意味をも表すと主張する。動詞の＜doeda 構文＞については、先行する動詞を「行為動詞」と「思考動詞・知覚動詞」にわけ、＜doeda なし構文＞との相違点をあげる一方、＜되다 doeda 構文＞独自の意味を明らかにすることを試みている。まず、行為動詞の＜doeda 構文＞の用法を、行為を引き起こす原因となる＜外的事情＞の種類によって、四つの用法に分類している。＜外的事情＞によって行為を遂行する意図が生じ、その結果、行為が行われるという意味を表す３つの用法（＜仕方なく＞、＜目的＞、＜外的理由＞）には否定文が続くことが可能であることから、＜doeda 構文＞のこれらの用法では行為動詞の表す行為の実現が必ずしも含意されないことがわかった。また、４つ目の用法（＜誤って＞）では、意図的に行われた[行為 A]が、意図していなかった[変化 B]を生じさせ、その結果[行為 C]が実現されることを意味することを論じている。これら行為動詞の＜되다 doeda 構文＞に共通しているのは、意図のあり方が、典型的な行為動詞の場合とは違う点であると言える。一方、否定文が続くことのできない思考動詞および知覚動詞の＜되다 doeda 構文＞は、「時間的経過」を表す副詞句を伴うという特徴があると述べている。

第３章は、形容詞が先行すると＜状態変化＞の意味を表す＜jida 構文＞が、動詞が先行するとどのような意味を持つかについて、本動詞「지다 jida」の持つ＜自発＞の意味に基づいて考察している。その結果、先行する動詞のタイプ、つまり他動詞の場合は、対になる自動詞の有無、自動詞の場合は、非能格、非対格などの違いによって、＜jida 構文＞が＜受動＞、＜可能＞、＜状態変化＞の意味を表すことを明らかにした。また、「boda（見る)、 deudda （聞く)、moleuda （分からない)」は、＜jida 構文＞を用いることのできないことを指摘している。

第４章は、補助動詞として用いられ、日本語の「てくる」「ていく」と対応する韓国語の「a oda」「a gada」を、両言語の対照のために、吉川（1976）の分類にしたがって考察している。まず、補助動詞の意味を客観的に記述するため、本動詞「クル」「イク」（「oda 来る」「gada 行く」）

の基本的な意味が空間的移動表す典型的な移動の意味から、時間的移動までその意味が広がることが分かった。研究の対象としてあげた三つについて、次のようにまとめている。

第一に、「てくる」には＜心理的変化（心理的方向性）＞の意味が含まれているのに対して、韓国語の「a oda」にはそのような意味がないという点に注目して考察を行っている。この場合の「てくる」は、寺村（1984）にしたがって、「X ガ V スル」という現象がひとつの幅をもったものとして、話し手に接近することを表すとしている。これは話し手による積極的な行為ではないこと、すなわち、事象、事態などに注目し、それが話し手という場所に接近することを意味するとも考えられる。このような「てくる」を韓国語にするときは、＜doeda 構文＞、＜jida 構文＞が用いられるが、これらの構文を用いると、起こった事態に対して、＜doeda 構文＞は何らかの原因があっての＜変化＞を表すのに対して、＜jida 構文＞は自然に起こると解釈された＜変化＞を表現すると論じている。したがって、韓国語の諸表現では、「てくる」の意味を充分に満たすことができないことがわかった。

第二に、「ていく」にはない「a gada」の用法も考察した。「完成の到達点指向の持続」をその基本的な意味とするということで、「時間的方向」もしくは「コトに対する完了」までも表すことができる「a gada」は、すでに生じた事態に対して、それを見つめる気持ちを意味含むので、事態を話し手の意志を越えた力によるものとして捉えているとし、「a gada」を用いることで、自身の心境や感覚を表すことによって、自身の意志を越えて結果がそうなったことを表すことができると論じている。

第三に、「てくる」「ていく」（韓国語の「a oda」「a gada」も含めて）に、形容詞が先行する場合を検討した。日本語の場合、「～くなって、～になって」の形を用いることで「てくる」「ていく」のとの結びつきが可能になるのに対して、韓国語の場合は動詞と同じ形式を用いること、また、韓国語においては、「だんだん」のような漸次的意味を表す副詞句がなければならないという制約があることが分かった。

最後の第５章では、第２章の＜doeda 構文＞と第３章の＜jida 構文＞の用法における制約と意図性を取り上げて、全体の議論のまとめを行っている。

本論文は、韓国語で＜状態変化＞を表すとされる＜doeda 構文＞と＜jida 構文＞について、日本語の対応表現とも対照しつつ、両構文の特徴を明確に指摘している。特に、これまであまり詳しい分析がなされていなかった＜doeda 構文＞を詳細に分析し、その特徴と類似する＜jida 構文＞との違いを明確にした点は、従来の研究にはない独自の成果である。また、従来日本語「てくる」「ていく」には「a oda」「a gada」が対応するとされていたのに対し、日本語の「てくる」「ていく」に「a oda」「a gada」が対応しない場合があること、それを補う形で＜doeda 構文＞＜jida 構文＞が使われていることを示したことも、本論文の功績と言えよう。このような点において、本論文は、韓国語学だけでなく、日本語学、言語学の分野において高く評価される論文だと考える。なお、jida 構文の認定や意味の規定に不明確な点があること、個々の分析の相互関連性についての説明が不十分なこと、など今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。